

# 田尻 浩さん(59期)との 出会いと別れ

杉田 明傑 陸自63

最近「偕行」の誌面が良質化したと思われる一方、従前会員と言われる陸士出身の方の記事が少なくなってきたのは時の推移とは申せ淋しい気がします。

せめて昔お世話になった人の思い出などを記させていただきたいと思えます。なお敬称は尊敬と親しみをこめてさん付けで呼ばせて頂くことをお許し頂きたいと思えます。

田尻さん(59期)が幹部学校指揮幕僚課程(CGS)を修了し熊本にある第8特科(砲兵)連隊の幕僚として赴任してこられたのは昭和42年の夏でした。駐屯地はかつて田尻さんが、お父上(24期少将)の後を継いで軍人の道を歩み始められた熊幼の地であり、感慨をもって着任されたものと思われま

す。当時の連隊は九州部隊の特色か、北方勤務を終えて帰任した定年前の幹部や陸曹が多かったように思います。防大卒業生は1期生が1尉で特科中隊長を、以下12期生まで7、8名の幹部が配置され平穏な勤務をしておりますし

た。そのような連隊に3科長として着任された田尻さんは眼光鋭く一見近寄りたく見えたものでした。

日が経つにつれてノモンハン帰りの月野木精連隊長(51期)の全幅の信頼を得て、澁刺と活躍される姿を私たちは遠望しておりました。その年の秋、各大隊に対して訓練検閲がありました。検閲は実員指揮と実弾射撃に分けて行われ、実員指揮は、阿蘇南郷谷において防御する戦闘団に協力する中砲大隊の行動が検閲されました。今では考えられませんが雄大な阿蘇一帯の生地を縦横に行動して陣地を展開しました。火砲だけはさすがに旗で標示しましたが、それ以外の諸機関は殆ど実員実物をもって行動しました。その想定も、行動もダイナミックでした。検閲終了後の連隊長の講評も素晴らしい、腑に落ちるものでした。わが第5大隊長(鐵田晋助2佐56期)が褒められたことが嬉しかったのですが、それとともに緻密で戦術理論に裏付けられた想定と検閲の仕組みには初級幹部ながら感銘を受けたものでした。その計画実行講評起案は言うまでもなく田尻さんの手によるものでした。あとで聞いたことですが、検閲計画を策定するに当たり、連隊長はもとより、谷村弘師団長(49期砲兵)にも報告説明して指導と

了承を得ていたとのことでした。若手幹部が田尻さんの官舎に押しかけるようになったのはそれからでした。家王の田尻さんは戦術や内外情勢、人生論など、元氣だけが取り柄の私たちに、辛抱強く付き合ってくださいました。議論は情け容赦なかったのですが、いつも公正で温かさがありどの幹部にも分け隔てがありませんでした。経験されたシベリア抑留についても聞きかかったのですが「人間なんてざりぎりになればそんなにきれいなものではないよ」と言われたくらいで、もとより良い思い出はなかったでしょう、あまり話されませんでした。

米軍が残した木造老朽官舎で、奥様にはまだお小さい娘さん達を養育されながら、お世話をいただきましたが、3佐の給料では、食欲旺盛な青年幹部の胃を度々満たすのに随分ご迷惑をおかけしたことを後年しきりに思ったことでした。そのような日々、私たちが学んだことは多かったです。そしてそれは田尻さんとの40数年に亘るお付き合いの始まりでもありました。

田尻さんは2年後には幹部学校に転出されましたが、その後何名かがCGS他の課程に進んで行きました。田尻さんは第1特科群長を最後に第一線を退かれましたが、現職及び退職後の永い年月、機会あるたびに東京や北海道あるいは九州に夫妻をお訪ねし、また迎え、そして囲んでまいりました。そのような時の田尻さんの満面の笑顔が忘れられません。お陰様で薫陶を受けた当時の部下たちはそれぞれやりがいのある職務を得て、微力ながら国の防衛の一端を全うすることが出来たと思っております。

平成20年8月、田尻さんの訃報に接した時、地元の札幌だけではなく東京や熊本からも当時の者が葬儀に駆け付けました。同期生で鳥松在任の野俣明さん(59期)は私の防大時代の教官でもありましたが、「田尻君とは一体どういう関係だったのかね」と驚かれました。そして在道の陸士の先輩後輩が居並ぶ中、私たちは万感込めて田尻さんとお別れをしました。

思い返しますと、田尻さんとの出会いはガラ幹であった私たちの人生の転機でもありました。私たちが学んだのは、外見ではなく本当の姿を見ること、驕らず阿らず信じる道を歩むこと、自分に厳しく人に温かく接することなどでした。そして陸軍軍人の矜持を伝えて下さったように思います。13回忌にあたる今年、あらためて田尻さんのご冥福をお祈りします。(元第1師団長)